

2025（令和 7）年度

小論文

10：30～12：10

教養学部

学校教育学科

一般選抜(中期日程)

注意事項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は2枚あります。1枚は下書きに、1枚は清書に使いなさい。
提出は1枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

対話とはそもそもなんだろう。それは会話や議論とはどうちがうのだろう。

「英会話」とはいうが、「英対話」とはいわない。「会話が弾む」とはいうが、「対話が弾む」「議論が弾む」とはいわない。「議論に勝つ」とはいうが、「対話に勝つ」「会話に勝つ」とはいわない。

まず、会話からみていこう。

「会話」は知り合い同士、またはたまたま居あわせた者同士の気楽なおしゃべりをさす。しゃれた会話、楽しい会話というように、「会話がスムーズに進む」とは、なめらかで、よどみのない言葉のやりとりをいう。「会話が弾む」とは、ときどきジョークなどもまじえて、とぎれることなく、キャッチボールのように言葉のやりとりがつづくときだ。

それは音楽でいえばハーモニーだ。互いに協力して加速したり、ゆるめたり、盛りあげたりする。それによって関係性が深まり、親密度が増す。そのためにはそれぞれの楽器、つまりキャラが決まっていたほうがいい。

キャラがはつきりしていれば、期待される役回りもおのずと決まり、コミュニケーションがしやすくなる。リーダーシップをとる役、盛りあげ役、雰囲気づくりの役など、オーケストラのようにそれぞれの楽器の役回りが決まっていれば、ハーモニーは生まれやすい。

そのもつともシンプルな形が、漫才におけるボケとツツコミだ。ボケが世間的な常識から外れたことをいい、ツツコミが常識や論理の側からそのまちがいを指摘する。ボケは放っておくと間延びしてしまう。そこにすかさず相手が突っこむことでリズムや笑いが生まれる。会話が弾むときというのは、知らず知らずのうちにボケとツツコミのような緊張と弛緩のリズムが生まれている。

一方、「議論」は両方ともツツコミ役である。特定のテーマをめぐる、互いの主張をぶつけあい、相手の主張についての疑問点を問いただす。会話とちがって、ただ弾めばいいというものではなく、なんらかの結論に到達することが求められる。さらに、相

手に自分の正しさを認めさせ、勝ち負けを決することを目的とするのが「討論(ディベート)」である。

たとえば、ツイッターなどSNSの世界はツッコミであふれている。だが、その多くは議論にはなっていない。議論や討論では、自分の主張を裏づける根拠を明示して、話を論理的に展開することが求められる。そのためには、自分が使っている言葉の意味を明確にするとともに、相手が言葉にこめている意味をも理解する必要がある。しかし、SNS上ではたんに相手のささいな言葉尻をとらえた揚げ足取りに終始しがちだ。

それでは「対話」とはなにか。会話は知り合い同士や、たまたま居あわせた人のあいだでなされるおしゃべりであると述べた。それに対して、価値観がちがう者同士で交わされるのが対話だ。また、議論や討論とちがうのは、かならずしも結論を出したり、どちらが正しいかはつきりさせることを目的としない点だ。

会話がどちらかといえば互いの共通点を軸として話が展開していくのに対して、対話は互いのちがう点を軸として話が進む。同じものを見ていても、相手には見えていて、自分には見えていないものがある。また、自分には見えていても、相手には見えていないものがある。互いが見ている世界のちがいに注目して、それをいっしょに探究していこうとする姿勢でなされるのが対話だ。

たとえ会話が弾んでいても、どこか違和感をおぼえることがある。キャラに徹して、自分の役回りを演じていれば、会話はスムーズに進み、楽しい雰囲気にはなる。場の雰囲気をこわさないために、愛想笑いをしたり、よけいなことをいわないように口をつぐんだりすることもあるだろう。しかし、一方でなにか自分の中でスルーされているものがあり、その言葉にできない思いが胸の中に沈殿していく。そんな経験はないだろうか。

極端な例だが、たとえば、部屋の中で友人たちと話しているとき、部屋の隅に一頭のゾウがいるのを目にしたとしよう。冷静に考えれば、部屋の中にゾウなどいるはずがないことはあなたにもわかつている。まわりの人たちもなにもいわないので、見えているのは自分だけなのだろうとあなたは思う。

「ゾウがいる！」などと口にしたなら、変に思われるだろうから、あなたはゾウなど見えないふりをしておしゃべりをつづける。たいていの会話はそうやってつづく。みなそれぞれに視界の中にゾウやカモシカやイノシシがいるのかもしれない。でも、そのこと

に気づかぬふりをして、会話をつづけるうちに、自分の中のゾウが見えなくなっていくのだ。

けれども、自分の中のゾウの存在感が大きくなりすぎて、がまんできず「この部屋にゾウがいる」と口にしてしまったとしたら、
どうだろう。一瞬、シーンとなるかもしれない。あるいはそのままスルーされてしまうかもしれない。

会話を中断したり、とぎれさせたりすることはハーモニーを崩してしまう。しかし、対話はちがう。^ア対話は、むしろとぎれたり、隙間があいたりするところからはじまる。

対話的姿勢とは、たとえ相手の言葉が自分の理解を超えていたとしても、それを相手の心の現実として、そのまま受けとめる態度だ。

「えっ、ゾウが見えるんだ!」「どのへんに?」「どのくらいの大きさ?」「どんな様子?」といったように、相手にしか見えていない世界に関心を寄せる。それを自分の常識の物差しで判断したり評価したりせず、まずは相手にとってリアルなものとして受けとめようとする。それが対話的姿勢だ。

世界が多様化し、さまざまな価値観をもった人たちがいる中では、対話的姿勢は重要だ。そのためにまず必要なのは、「ゾウがいる」といっても否定されたり、スルーされたりしない安全な場である。対話には、なにかの役割を担ったり、キャラを演じたりしなくても、安心してそこにいられるような場が必要なのだ。

弾むような会話は、音楽でいえばハーモニーにたとえられると述べた。ハーモニーはそれぞれの役割をもった声が重なりあってつづいていく。とぎれなく、隙間なくつづきながら、あるメインとなる旋律を盛りあげていく。いわばシンフォニー(交響曲)のよ
うなイメージだ。

それに対して、対話はしばしばポリフォニー(多声音楽)にたとえられる。ポリフォニーとは、それぞれの声のパートが、独立した旋律をもち、どのパートも対等な重要性をもつて重なっていく音楽様式だ。主旋律があるわけではなく、どこに耳を澄ますかによつて、音楽はちがつて聞こえてくる。

対話がよくて、会話や議論がよくないというのはのではない。会話がふさわしい場もあるし、議論や討論が必要な場もある。でも、

人と人との言葉のやりとりが、会話や議論だけになってしまうと、その中では伝えられない思いが行き場をなくしてしまう。

対話ができる空間とは、自分が感じている違和感を安心して表明できる場のことである。共通点を確認することによって安全を得るのではなく、ちがっていても安全であることを確認する場だ。

とはいえ、対話的空間をつくるのは、^イけっしてかんたんではない。国家間の対立や紛争の調停にあたって「対話が重要だ」とよくいわれる。しかし、実際には、互いの利害関係や、「支配／被支配」といった関係性が固定化してしまったうえでの対立を、対話によって崩すのは容易ではない。互いの関係性が固定化する前の、小さなひっかけりや漠然とした違和感があるという段階でこそ対話は力を発揮する。

人は生きていくうえで対話的空間にずっととどまれるわけではない。不本意なことを受け入れなくてはならないこともある。どっちが正しいかを決めなくてはならないこともある。それによって傷つくこともある。

しかし、傷つけないために対話をするのではない。むしろ逆である。互いが安全に傷つくためにこそ対話がある。人は傷つくことなしには生きられない。生きるとは傷を受け、そこから回復することのくりかえしにほかならない。傷がとり返しのつかないほど深くならないようにするためにこそ対話をつづけるのである。

出典：田中真知『風をとおすレッスン 人と人のあいだ』（創元社 二〇二三年）より一部を改変した。

設問一 傍線部アで、筆者は「対話^アは、むしろとぎれたり、隙間があいたりするところからはじまる」と述べていますが、それはどのようなことですか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二 傍線部イで、筆者は「対話的空間をつくるのは、^イけっしてかんたんではない」と述べていますが、あなたは「対話的空間をつくる」には何が重要だと考えますか。課題文を踏まえながら、自分の体験や見聞を交えて八〇〇字以内で述べなさい。